

国内経済情勢

概 観

金融機関貸出が厳しく抑制されるなかで、企業の借入れ需要は一段と強まっており、貸出金利は上げ足を速めている。また、マネー・サプライの増勢も引き続き着き傾向を示している。

商品市況の面では、8月末以降一部主力商品等に異常な高値を訂正する動きがみられるが、実需の堅調等を映じて需給の大勢になお大きな変化はなく、卸売物価は依然かなりの騰勢を続けている。

この間、国際収支は、貿易収支が一時的要因も加わって黒字幅を著しく縮小したことを主因に、引き続き赤字を記録した。

資本財出荷は引き続き増大

8月の鉱工業生産(季節調整済み、速報)は前月比+1.1%と増加した。これは、一般資本財が大型機械を中心にかなりの増加を示したためで、建設資材、耐久消費財は減少、また生産財も電力・工業用水不足を映じた鉄鋼、紙・パルプの減少により小幅の伸びにとどまった。

8月の鉱工業出荷(季節調整済み、速報)は前月比-1.6%(不規則変動の大きい船舶を除けば-0.1%の微減)と伸び悩みを示した。財別にみると、生産とはほぼ同様、一般資本財(機械プレス、圧延機械)が大きく増加した反面、建設資材(セメント、形鋼)、耐久消費財等は減少し、生産財も鉄鋼の輸出船積みの遅れなどもあって増加は小幅で

あった。

8月の生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は、乗用車の一部車種モデル・チェンジに伴う積増し、灯油、石油ストーブの備蓄などを映じて前月比+1.7%と3ヵ月ぶりに増加し、製品在庫率指数(同)も89.6と前月(86.7)比若干上昇した。なお、流通段階の買控えなどを映じたとみられる製品在庫増加は、繊維二次製品、電気銅等ごく一部の品目にとどまっている。

8月の設備投資関連指標の動きをみると、一般資本財出荷(季節調整済み、速報)は前月に引き続きかなりの増加(前月比+5.0%)を示したが、先行指標である機械受注(船舶を除く民需、季節調整済み)は、前月比-5.7%と2ヵ月連続の減少となった。これは電力からの受注減に加え、当月は製造業からの受注も、資材手当てや価格面での折合い難などもあって数ヵ月ぶりに減少したためである。一方、建設工事受注額(民間産業分、季節調整済み、速報)は、前月比+6.4%と、単価の上昇も加わってかなりの増加を続けた。

8月の全国百貨店売上高は、前年同月比+24.8%と、ここ数ヵ月に比べれば伸び率がやや鈍化したものの、引き続き高水準で推移している。

8月の労働関連指標をみると、有効求人倍率は1.91と引き続き高水準となっている。この間、所定外労働時間(全産業、季節調整済み)は夏期休暇の増加等を映じ2ヵ月連続して大幅な減少をみた。

繊維、鉄鋼等に高値訂正の動き

9月の商品市況をみると、化学製品(塩ビ、か

性ソーダ)やセメント、紙・パルプ、亜鉛等が需給ひっ迫を映じて上伸基調を続けたが、天然繊維、銅は8月末以降反落し、8月中上昇の目だった鉄鋼、一部内地材等でも高値訂正安商状を続けた。こうした市況軟化は、引締め強化の心理的影響に加え、供給制約要因(電力・水不足)の緩和に伴う極端な品薄感の後退(とくに鉄鋼)、これまで相場の下支え要因であった海外相場の反落(豪毛、中国生糸、銅)などを背景としたものである。もっとも、ここへきて需給の実勢が見直され、在庫調整の動きが進んでいる商品は当面天然繊維等一部にとどまっている。

卸売物価は、8月前月比+2.1%と7月に引き続き記録的な高騰を示したあと、9月に入っても上、中旬とも前旬比それぞれ+0.8%、+0.3%と依然かなりの上昇を続けた。これは、繊維製品、非鉄金属が上中旬とも下落し、鉄鋼も中旬には騰勢鈍化を示したものの、その他、化学製品、一般・精密機械、食料品等が根強い騰勢を続けているためである。この結果、月中としてもなおかなりの上昇となる公算が強い(中旬の前年同月比+18.7%)。

9月の消費者物価(東京、速報)は、野菜の急騰を主因に食料が大幅上昇したのをはじめ、秋冬物衣料の高値を映じて被服も上昇幅を拡大したため、前月比+2.8%と急騰、前年同月比上昇率は+14.5%に達した(季節商品を除く総合では前月比+1.6%、前年同月比+13.0%)。

企業の借入れ需要さらに強まる

9月の金融市場は、銀行券が1,795億円と前年(1,519億円)をいくぶん上回る発行超となり、財政資金対民間払超額も外為会計の揚超を主因に2,576億円(前年同4,360億円)にとどまったため、

「その他」勘定と合わせた月中資金余剰額は384億円と前年(同2,849億円)を大幅に下回った。もっともこの間、多額の準備預金積増しが進み、日本銀行は手形買入れおよび貸出により市場を調節した。コール・レートは都市銀行筋の強い取入れ需要を映じて通月堅調な地合いで推移し、12日および22日にはそれぞれ0.25%ずつ上昇した(月末無条件物出し手レート9.0%、もっとも10月1日には0.25%低下)。また、手形売買市場でも10月3日年越物レートが上昇をみた(買手レート年越物9.75%、その他9.25%)。

9月の銀行券平均発行高は前年同月比+27.1%と、高水準ながらも伸び率はやや低下した。また、8月のマネー・サプライも、前年同月比では+31.4%(前月同+32.7%)と高水準を続けたが、季節調整後の動きをみると引き続き落着き傾向を示している。定期性預金を含む広義マネー・サプライの伸びでみても、同様の動きを示している。

8月の全国銀行勘定をみると、貸出増加額は前年同月比-5.2%と、5月以降4ヵ月続けて前年を下回る増加にとどまり、一方実質預金は3ヵ月連続の純減となった。貸出残高の前年同月比伸び率は+22.4%(4月末同+25.3%)に低下をみている。また中小企業金融機関貸出の増勢も総じて鈍化傾向を強めている。この間、企業の資金需要動向をみると、中堅・中小企業および大企業非製造業からの需要が引き続き強いほか、大手製造業でも、原材料手当て等所要運転資金の増高に加え、先行き調達難に備える動きもあり、借入れ需要を強めている。

8月の全国銀行貸出約定平均金利は、月中0.142%の上昇と前月(同0.137%)に比しさらに上げ足が速まった。これは、上記のような企業の積極的

な借入れ態度を背景に各金融機関とも利上げに本腰を入れているため、出遅れぎみであった長期貸出金利および中堅・中小企業向け貸出金利もかなりの上昇をみた。なお、9月から10月にかけて、国債をはじめ各種債券の発行条件および長期貸出最優遇金利について、さらに引上げが行われた。

9月の公社債市況をみると、残存期間が短期ないし中期のものは引き続き軟化したものの、長期物は売却が減少する一方値ごろ感による買入れもあって、下げ一服商状を示した。この間、企業の起債意欲は資金需要の盛り上がり映じて一段と強まっているが、起債関係筋では消化地合いを考慮し、10～12月の事業債起債額につき調整を実施することとなった。9月の株式市況は、模様ながめ気分の強まりから軟弱な地合いを続けた。

なお、最近の企業倒産状況をみると、従来経営面に問題を抱えながら安易な拡大方針をとってきた企業で行き詰まる事例が漸増している。

貿易収支黒字は大幅に縮小

8月の国際収支は、872百万ドルの赤字と、3月以来6ヵ月連続の赤字となった。貿易収支面で、国内需給のひっ迫等を映じた頃来の黒字幅縮小傾向に加え、輸出船引渡しの反動減、原油輸入の集中などの事情が重なってわずかな黒字にとどまったことが主因である。季節調整後の貿易収支じりは150百万ドルの赤字と、39年3月以来久々に赤字を記録した。

8月の輸出を通関ベースでみると、前年同月比+22.9%（邦貨表示額では+5.8%）と前3ヵ月続いた3割台の伸びを大きく下回った。これは、上記

船舶の反動減のほか、自動車がモデル・チェンジや夏期休暇などの影響から、また鉄鋼が輸出玉不足や港湾荷役の遅延などからそれぞれ減少を示すなど、主力商品の落込みが目だったことによるものである。地域別にみても、上記3品目の輸出比率の高い米国および西欧向けが低水準にとどまった。なお、9月の輸出信用状接受高（季節調整済み）は鉄鋼、一般機械、繊維等の減退を中心に前月比-2.3%と減少した。

8月の輸入（通関ベース）は、前年同月比+68.0%（邦貨表示額では同+44.6%）と引き続き高い伸びを示した。品目別にみると、繊維原料が落着きぎみの一方、原油の入着集中、前月著減した木材輸入の回復などから原燃料が当月はかなりの伸びを示し、また一般消費財、食料品も引き続き増大している。

なお、最近の通関輸出入動向を前年に比べてみると、輸出は数量の伸びが停滞ぎみの反面価格の上昇率が高まっており、また従来数量増加の寄与率が高かった輸入についても、このところ価格上昇の影響が一段と強まっている。

9月の外国為替市場では、輸入決済、対外送金需要の高水準を主因に需給は引き締まり基調で推移し、先物ディスカウント幅も総じて縮小傾向をたどった。

9月の外貨準備高は月中331百万ドル減とかなりの減少を示し、この結果、月末残高は14,795百万ドルとなった。

（昭和48年10月9日）